

前期：キリスト教と近代的知——宗教哲学構想

オリエンテーション——「キリスト教と近代社会の諸問題」

1. 前年度のまとめ——象徴論・言語論

1-1：人間存在と象徴・言語——象徴を操る動物としての人間

1-2：言語と実在・真理

1-3：人間的現実の構成——隠喩・モデル

2. 近代/ポスト近代と宗教哲学構想

2-1：近代の知的状況における宗教思想

2-2：批判哲学から批判的実在論へ 5/20

2-3：シュライアマハーの宗教哲学

1：シュライアマハーと宗教哲学の基本問題 5/27

2：シュラエルマハーの言語論の射程 6/3

2-4：ティリッヒの宗教哲学

1：ティリッヒの象徴論 6/10

2：ティリッヒの神話論——シェリング、カッシーラー 6/17

2-5：波多野精一の宗教哲学

1：波多野宗教哲学と実在論 6/24

2：波多野宗教哲学の方法論、そして象徴論 7/1

2-6：ヒックと批判的実在論 7/8

2-7：言語から宗教的実在へ

1：リクールと解釈学的プロセス 7/15

2：イエスの譬えの読解プロセス 7/22

2-8：言語論と宗教哲学 7/29

2-9：次元論と宗教哲学 10/7

後期：キリスト教と社会理論——経済と環境

<前回>近代の知的状況における宗教思想

(1) 「近代」を論じる際の留意事項

- ・宗教（キリスト教）との関連から見て、近代・モダンに、17世紀中葉以前と以降での段階を設定し、また、19世紀の末以前と以降とを区分する。

- ・多様性あるいは多元性→時差・ずれ。モダンとは伝統的・封建的な社会システムのシステム変動によって生成した社会システムの全体性。

(2) 世俗化とキリスト教的伝統的知の変動

3. パネンベルク『ドイツにおける新しい福音主義神学の問題史』（Pannenberg, 1997）：19世紀のドイツ・プロテスタント神学の問題状況を規定するものとして宗教改革後の宗教戦争の帰結、つまり教派的多元性の状況に注目している。

4. 世俗化論とその批判的再検討の必要性

5. Robin Gill, *The Myth of the Empty Church*, Society for Promoting Christian Knowledge, 1993.

(3) 近代的知と制度的再帰性

6. Anthony Giddens, *Modernity and Self-identity. Self and Society in the Late Modern Age*, Stanford University Press, 1991.

近代(modernity = a post-traditional order) と制度的再帰性(the institutional reflexivity)

人間存在（精神、自己）の基本構造としての再帰性一般とモダニティの特徴としての制度的再帰性との相違。

時間空間の形式化＝場所の具体性の喪失

9. キルケゴール『死に至る病』（斎藤信治訳、岩波文庫）

10. 宗教との関わりで問題な制度的再帰性の特徴

- ・ 懐疑の制度化（確実な知の解体）
- ・ 内部準拠性によるシステムへの繰り込みとシステムの自己修正

↓

- ・ 社会システムの外部の問いの削除、伝統や権威の解体

（４）宗教基盤の変動と再生——イデオロギーとユートピア

11. 19世紀の宗教批判に典型的に見られるように、近代という時代状況において、信仰はイデオロギー（アヘン）かユートピア（幼児性）かの二者択一にさらされることになる。

- ・ リクール「世俗化の解釈学——信仰、イデオロギー、ユートピア」、『解釈の革新』（久米博他訳）、白水社。
- ・ 芦名定道「ティリッヒのユーロピア論」、『ティリッヒ研究』（現代キリスト教思想研究会）、第3号 73-82頁。
- ・ 芦名定道「2 意味世界とユートピア」「3 現代の宗教的状況と終末思想」、『キリスト教と現代——終末思想の歴史的展開』（小原克博共著）、世界思想社、14-35頁。

12. しかし、再帰性によって成立するシステムは、その変動（いわゆる限界状況、戦争や革命、そして死）において、システム外部との関わり合いの問い、つまり、システムの根拠づけ・正当化の問いにさらされるという危険（可能性）を除去することはできない。コントロールできないリスクの存在はモダニティへの正当性への問いを提起し続ける。モダニティにおける抑圧されたものの回帰、宗教は衰退しない。

安心・予測（未来の植民地化）を目ざしてきた再帰的なコントロール自体が、大きな不安定要因となる。それが生み出す不安な世界という予想外の事態。

<問題>

伝統的宗教は、この不安に対する安心、実存的な確信をなおも与えるのか。

伝統的宗教は、根本的な懐疑にさらされているとすれば。

伝統的宗教の変革か、新しい形態の宗教の生成か。

13. 近代は再帰的な未完のプロセスであり、近代から、それ以降は生じない（ポスト近代という逆説）。

2. 近代/ポスト近代と宗教哲学構想

2-2：批判哲学から批判的実在論へ

（1）カントの批判哲学とその意義

1. 経験的実在論＝素朴実在論による近代科学の説明不可能性。

因果律あるいは科学法則の普遍性の問題への哲学的回答の試み

2. カント解釈の多様性あるいは幅

1) 多様な思惟の共通の前提、しかしカント自身は単純ではない。

素朴実在論・素朴経験論・独断論への批判、理性の批判

- ・ 非実在論 → フォイエルバッハ

- ・ドイツ観念論
- ・批判的実在論
- 2) 批判哲学の射程
 - 科学的認識あるいは文化全体
- 3) カントにとって批判哲学がすべてか。

福谷茂「カントの《Opus postumum》の哲学的史的位について」、『カント哲学試論』知泉書館、2009年、207-235頁。

3. カントと形而上学

・「近代以降の西欧思想における形而上学への評価を考えると、それを規定する思想家として、カントをあげることができる。カントの自然神学批判や独断論批判はきわめてよく知られているが、形而上学との関わりで確認すべき点は、カント哲学における形而上学への二重の評価である。それは、「人間は本性的に形而上学的である」と「形而上学的問いは人間の理論理性の能力を超えている」という二つの命題に集約することができる。

『純粹理性批判』の第一版の冒頭で、カントは次のように述べている。

「人間の理性は、或る種の認識について特殊な運命を担っている、すなわち理性が斥けることもできず、さりとてまた答えることもできないような問題に悩まされるという運命である。斥けることができないのは、これらの問題が理性の自然的本性によって理性に課せられているからである。また答えることができないのは、かかる問題が人間理性の能力すべてを越えているからである」、「この果てしない争いを展開する競技場がすなわち形而上学と名付けられているところのものである。」

・カントによる伝統的な自然神学や形而上学への批判は、人間理性の能力を越えた事柄に対する間違った接近方法に向けられたものであって、ここに現代の形而上学批判の発端を見ることができる。しかし、カントに批判哲学は単なる形而上学批判にとどまらず、人間の自然的本性に属する運命的な問いにいかにかアプローチするのか——「将来建設されるべき形而上学」——を視野に入れた議論だったことを忘れてはならない。（芦名定道「キリスト教思想と形而上学の問題」『基督教学研究』24、2004年、5頁）

Die menschliche Vernunft hat das besondere Schicksal in einer Gattung ihrer Erkenntnisse: daß sie durch Fragen belästigt wird, die sie nicht abweisen kann; denn sie sind ihr durch die Natur der Vernunft selbst aufgegeben, die sie aber auch nicht beantworten kann, denn sie übersteigen alles Vermögen der menschlichen Vernunft. (A.VII) ... Der Kampfplatz dieser endlosen Streitigkeiten heißt nun Metaphysik.(A.VIII)

so den ganzen Vorriß zu einem System der Metaphysik verzeichnen (B. XXIII)

4. カントと人間学的転回

・波多野精一「宗教哲学の本質及其根本問題」（1920）：波多野宗教哲学の原型・原構想
 「カント」「批判主義」「カントを理解することは彼を超越すること」「しかもカントを超越しよ」（200）「うと欲する者は、先ず最初に彼を理解しなければならないのである。批判主義はその主義と精神とをカントから継承する」、「歴史においてその具体的内容を実現する文化の諸領分に関して、その理性における根拠、その各に一定の意味、一定の価値を与える原理を研究することに、批判主義の根本精神は存在する」、「カントは先ず『純粹理性批判』において、かかる新しい方法、新しい態度を学問の範囲について提出し、遂行した。そして彼は次第に道德や美的生活の領域へ、同じ態度、方法の適用を広めてい

った。宗教に関する彼の議論は、幾分の不完全と不徹底とを免れ難いが、しかも原理的には同一の精神に立脚しておるといえることができる」、「カントにおいて、宗教哲学が批判主義の指示す新しい道を出発し、進行しておるのを見るのである」(201)

「批判主義の宗教哲学は、主理主義的形而上学や超自然主義のそれと異なって、宗教の対象の哲学的考察ではなく、宗教そのものを対象とする哲学である」(201)

・パネンベルク

Die Anthropologisierung der metaphysischen Funktionen Gottes in Kants Kritik der reinen Vernunft, in: W. Pannenberg, *Theologie und Philosophie. Ihre Verhältnis im Lichte ihrer gemeinsamen Geschichte*, Vandenhoeck & Ruprecht, 1996, S.184-195.

(2) カントから批判的実在論へ

4. 宗教哲学にとっての科学哲学と意義、類似性

宗教も科学もそれがコミットする存在の実在性を前提にする。そして、宗教と科学という人間の活動は実在する。この実在する宗教と科学とが存立するための条件を解明することが、宗教哲学と科学哲学の課題となる。この課題に適切な解答を与えうるかという点で、諸理論は優劣が判定される。

宗教も科学も、日常性（いわゆる経験・感覚与件）の単純な延長線上には存在しない。言語論的には、第一度の指示の世界ではなく、第二度の指示の世界が問われる。

5. ギルキー：批判的実在論

Langdon Gilkey, *Nature, Reality, and the Sacred. The Nexus of Science and Religion*, Fortress, 1993.

6. 現代のコスモロジーの立場は客観的科学的な経験主義、実証主義、素朴実在論であり、今日物理科学の実証主義的見方が提示する世界の内においてはいかなる様態の宗教もほとんどあるいはまったく意味をなさない。投影理論による宗教の説明。

7. 感覚主義的ドグマ

These two assumptions --- (1) that natural science (and, possibly, only physics) alone knows what is real; and (2) that what science knows through its models and formulas is "there", real in itself, the way it all really is (14)

Naive realism assumes (1) that ontological entity and scientific explanation are isomorphic; (2) that this explanation uncovers the entire "mystery" of the object, so that no other explanation is either necessary or possible; and (3) that any alternative explanations, or modes of inquiry, are competing explanations on the same plane, unequivocally false, and thus cancelled out by the "correct" explanation. (50-51)

the two sensationalist dogmas that *only* through sense data is reality known and that science *alone*, therefore, gives indication of what is real (63)

8. 感覚主義のドグマを越えて

感覚主義（感覚データと通してのみ、科学のみが）の誤謬

経験のより根本的な知の様態（現実性とのより直接的な接触）＝非感覚的な知覚
非感覚的な経験

すべての経験にとって決定的な諸要因：反証不能

変化の普遍性、秩序の普及性・浸透性（遍在性）、時間内部の連続性、
新奇さの出現、目的と価値の重要性など

9. もっとも有力な反論（哲学的、別の科学哲学、新しい科学理解）→哲学的神学

S. Ashina

科学的知の実証主義的見解は認識過程の特性と科学的知識自体についての誤解を示している。

mind and purpose are invariably understood as only epiphenomenal products of a process void of both; ... The method of the physical sciences rightly excludes consciousness, self-consciousness, and purposes from the objects it recognizes; ... by the canons or rules of its method, its world is reductionist and determined. The mistake, as Whitehead said, is to take that world not as a construction of sense and of mind, ... but as itself the only real world. (68)

all inquiry is theory-laden,

natural science is "kin" to the discipline known as hermeneutics. (60)

10. 批判哲学

Immanuel Kant formalized and ordered this critical view: the manifold of experience is shaped originally by the forms of intuition (space and time), and it is unified and ordered by the categories of understanding (causality and substance). Thus the entire manifold of experience possesses its universal order, ... modern "empirical" physical science in this way becomes possible. Nevertheless, that world of ordered sequences governed by necessary law is only the *phenomenal* world, a construct by human sense and by the human mind out of the given. ... not the "real" world, the "thing in itself" or *noumenon* ... Critical philosophy did not completely sunder scientific knowledge and "reality," but it surely distinguished them --- and led many to think that the naive realism of pre-Kantian philosophy was at an end. (61)

11. 心の構成的役割という議論の危険性

A view that rejects naive realism and stresses the constructive actuality of mind faces the dangers of relativism and skepticism. it seems to put itself in danger of ultimately granting no validity to scientific knowledge at all. (69)

実在はせいぜいのところ曖昧なものにとどまるか、悪くすると認識されない。

→ 相対主義、懐疑主義

科学的認識の妥当性の全否定は、現代文化の一員にとっては不可能。

ここで可能な問い：個別科学の与える描像・モデル・一般原理・定式は存在する。これらは、全体的で最終的な知識なのか。

・感覚的経験・科学と経験され認識された諸現実とは同型的ではなく類比的

If sensory experience and the science based on it are not isomorphic with the actualities so experienced and known, then the least they can be said to be analogical. (69)

12. 批判哲学の再定式化の試み、カント的二元論の再定式化

ホワイトヘッド、サンタヤナ、ティリッヒ

they reformed in more intelligible terms the Kantian distinction between their world of appearance and so of scientific theory, on the one hand, and the ontologically real world, the Ding an sich, on the other hand. (62)

"the realm of matter" (Santayana)

"concrete actuality" (Whitehead, Husserl, Heidegger, Tillich)

Whitehead says about sensory experience and science alike that "the categories are derived elsewhere," as are the rational grounding of science in a universal order and the basis of our certainty of that order. (73)

感覚的経験・科学について、カテゴリーは別のところより由来する。

この自覚によって知られる内的参与の要素がないところでは、いっさいの主観を削除

した対象の排他的全体性、主観の側からの徹底した懐疑主義が帰結する。

(極端な実証主義と極端な観念論)

13. 修正された柔らかい批判哲学

In my argument I have espoused a modified or, perhaps, "soft" critical philosophy, emphasizing the role of mind or spirit in providing some of the essential conditions of science and thus in actually structuring the picture of reality that science presents to us. (69)

(3) ロイ・バスカーの批判的实在論

14. 『科学と实在論 超越論的实在論と経験主義批判』法政大学出版局。

(Roy Bhaskar, *A Realist Theory of Science*, Leeds Books, 1975.)

・古典的経験論(素朴实在論)と超越論的観念論(批判哲学)に対する超越論的实在論(批判的实在論)

・経験主義(暗黙の存在論、原子論的事象/表象、閉じた系、人間中心主義)は、科学的発見と実験の意味を説明できない。個人的な感覚・経験の一般化によっては、科学は成立し得ない。

15. 「認識が対象に従うのか、それとも対象が認識に従うかの、二つに一つである。われわれの語り的事物の関数なのか、それとも事物がわれわれの語りの関数なのか、そのいずれかである。超越論的観念論はこのような言い回しを好んで使う。しかし、これはまやかしの二分法である。科学は一つの活動であり、思考を通じて展開される一個の自然史的過程である。つまり科学は、思考とは独立に存在する事物の本性或組成や作用様式を思考の内に表現せんとする営みなのである。」(325)

「事物はわれわれがそれをどう記述するかとはまったく無関係に存立・作用している。反面、われわれは特定の記述を通じてしか事物を認識することはできない。記述は人間の織りなす社会という世界に属しているのに対して、対象は自然という世界に帰属する。」(326)

↓

・「経験・感覚/事象/事物」の区別 → 事物=非経験的・超事実的

cf. カントの「物自体」

・「科学が可能であるためには、その対象である世界はどのようであればならないか。」

(19)

自然法則は人間が存在しない世界でも作用し続ける。

↓

・transitive (他動的) と intransitive (自動的)

科学は社会的活動であり(先行する知的活動という素材が前提となる)、知識はその産物である→哲学的社会学

知識社会学

科学は自然の实在的な構造やメカニズムといった人間存在とは独立して存在する事物と法則についての認識活動である。

・自然と科学的認識における階層性・分化

経験主義は階層性を認めない、還元主義。

(4) ジョン・ヒック

7月8日の講義へ